

●第 32 回シナプトロジストの会

今年度幹事：加藤総夫（東京慈恵会医科大学・総合医科研・神経生理学）

日 時：平成 20 年 3 月 26 日 19 時～21 時

会 場：京王プラザホテル 本館 44 階ハーモニー

参加者：59 名（うち招待者および事務補助各 1 名）

概要

「シナプトロジストの会」は今回で第 32 回を迎えた。会に先立ち、会場に隣接するアイリスにおいて幹事会を催した。幹事会では、IUPS2009 と同時開催される第 86 回京都大会におけるシナプトロジストの会について、および、第 87 回盛岡大会の幹事について議論がなされた。IUPS2009 には Neher 博士および Poo 博士をはじめシナプトロジー関連領域の高名な研究者も多く参加される予定のため、その歓迎と各国のシナプス研究者交流の意味も込めた会を催す方針を確認し、同志社大学・高橋智幸先生および京都大学・平野丈夫先生の 2 名に中心となっていただいで企画していただくこととした。また、第 87 回盛岡大会では、本会幹事であるとともに大会長である岩手医大・佐々木和彦先生のご意向で東北大学・八尾 寛先生に幹事を務めていただくこととなった。

会場を隣室ハーモニーに移し、プレパーティートークとして金沢大学東田陽博博士に話題提供をお願いした。Jin et al., Nature 446 (7131):41-5, 2007 に報告された研究成果を中心に、「社会認識記憶と自閉症：cADP ribose と CD38 のカルシウム遊離チャネル活性化作用の脳生理学的意義を求めて」という演題でお話をいただいた。普段シンポジウムなどでは聞けない研

究秘話などもご披露下さい、とお願いしたところ、むしろ、そちらが中心となり、流行に左右されることなく自分の信念に基づいて研究を進めることの大切さ、そして、その研究がどのような社会の問題と連関しているかを常に考えることの重要性を、楽しいユーモアあふれるお話を通じて示され、特に若手の研究者には意義深いお話であった。

小澤滯司先生の乾杯のご発声によってパーティを開始した。大会の会場と同じ、京王プラザホテルの 44 階の宴会用の会場であったため、ホテルの計らいで乾杯とともにカーテンが開き東京の夜景が眼下に広がるという演出があった。会話が弾む中、あっという間に食べ物がなくなり閉宴の時を迎えた。今回は、(1) 教授・准教授・PI (24 名)、(2) 有給研究者・教員・ポスドク (21 名)、および、(3) 学生・院生・研究生 (12 名) という 3 カテゴリー会費を設定した。カテゴリー (2) の参加者はほぼ参加費＝飲食会場費とし、定年までシナプトロジー研究を続ける (1) のカテゴリーが未来のシナプトロジーを支えることが期待される (3) のカテゴリーを補助する、というのが理念であったが、幹事の不手際からうまく均衡がとれず、今後の課題と思われた。